

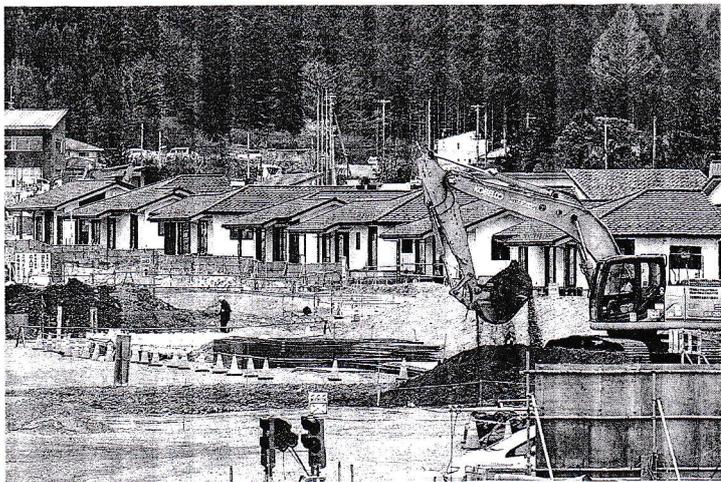
生が復興する多様なつながり

ひもとく

東日本大震災10年

横浜国立大学教授・東北大学名誉教授
(社会学)

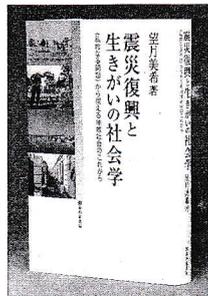
吉原 直樹



避難指示が解除された福島県大熊町の大川原地区。災害公営住宅が立ち並び、2019年4月

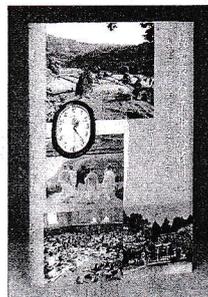
震災復興と生きがいの社会学
〈私的な問題〉から捉える地域社会のこれから
望月 美希〈著〉

御茶の水書房 8580円



故郷喪失と再生への時間 新潟県への原発避難と支援の社会学
松井 克浩〈著〉

東信堂 3520円



つながりが生み出すイノベーション サードセクターと創発する地域
菅野 拓〈著〉

ナカニシヤ出版 4180円



も、ほぼ同じ地平に立っているといえる。新潟県柏崎市で一人の女性が立ち上げたサロンを事例として、広域避難者の生活の再生、関係の結び直しに照準を合わせる。地域がはぐくむ拘束的でない「つながり」に期待を寄せるが、それは被災者がふるさとへの帰還を強いられず、ありのままに許されることが許される時間空間を獲得することによって可能になるという。

支援届ける連携

3・11—あの震災からやがて10年。私自身、仙台で被災し、その後ほぼ9年間にわたって、隔週で福島県大熊町民の避難地(同県会津若松市)に通っているが、いま何よりもめられているのは、過去10年間の復興政策の総括である。これまで、しばしば指摘されてきたのは、災害資本主義にもとづく「経済的復興が主潮をなしてきた」というものである。少なくとも復興が、インフラ復旧と「ハコモノ」建設を基調とする、大沢真理のいう「大文字の復興」であったことは紛れもない事実であろう(大沢ほか編『復興を取り戻す』岩波書店・1980円)。

それは、原発事故被災地に限定するならば、被災者の被災地自治体への帰還誘導を前提とするものであった。この帰還誘導に

土地に縛られず

において重要な役割を果たしたのが、「元あるコミュニティの維持」という名の下に、避難先で半ば強制的に設置された自治会であった。この自治会は、避難先で諸個人の間でいとなまれる共同生活のなかみを公行政につなげる上で欠かせないものになったが、結局のところ、ふるさとへの帰還を強いる「コミュニティ」施策の一翼をになうことになった。その点では、単線型の復興のありようを如実に示すものでもあったのだ。

だが復興がすすむなかで、被災者の多様な声を反映させるには、丹波史紀・清水晶紀編著『ふくしま原子力災害からの複線型復興』(ミネルヴァ書房・7150円)でいうような「複線型復興」、そしてそのひとつである被災者一人ひとりに寄り添う「小文字の復興」が不可欠

という認識が広がっている。それとともに自治会とは異なるコミュニティの存在形態が注目されるようになっていく。望月美希『震災復興と生きがいの社会学』では、被災者の「生きがいの喪失」という私的な問題を「他者との間に開いていく実践」のただなかに開いて、問い直す。具体的に、被災者に農作業の場を提供する宮城県亘理町の「健康農業」という活動を挙げ、生きがいの回復を被災者の「生」の復興と重ねあわせる。そして、土地との括りに必ずしも縛られないコミュニティに着目する。そこでは地域が長い間になつてきた「共同性」の再構築が鍵となるが、内に閉じていけないことが重要な点だといえる。

地域に足を下ろしながらも、必ずしも地域を与件としないコミュニティの出現に目を向けているという点では、松井克浩『故郷喪失と再生への時間』社会学 大熊町の10年。◇よしはら・なおき 48年生まれ。近著に『震災復興の地域



かねた・たいおう 56
年生まれ。曹洞宗・通
大寺住職▽きたはら・
いとこ 39年生まれ。
災害社会史の研究者。

東日本大震災 3.11 生と死のはざままで

金田 諦應<著>

春秋社 1980円

震災と死者

東日本大震災・関東大震災・濃尾地震

北原 糸子<著>

筑摩選書 1870円

現場を重視 記録し考え続ける

多くの命を奪った震災、その死と向き合う2冊。

『東日本大震災』は、宗教者が被災地を巡回し、人々の話に耳を傾け続けてきた「傾聴移動喫茶」をめぐる動きがつつられている。

長い沈黙の末にきっかけを得て泣く母親、「さみしぐね」と意地を張る老女、嵐の日に訪問を待ち続けた人。現場でいつも「覚悟」を問われた。著者は宗教者に言う。「苦しみ悲しみの現場を見ろ。現場から立ち上がる沈黙の言葉を聴け！ここから絶対に離れるな」

いつとき気持ちが解放されても一生重く残る過去。手探りの活動を続ける営みは、「いつ終わるか分からない」「プロセス自体」に意味を持つている。

原発事故処理も終わりが見えぬ営み。福島からの問いは、単なる原発の賛否ではなく「私たちの文明のありさまへの問いだったはず」。わずか10年、考え続けるのを忘れてはいまいか。

『震災と死者』は、自治

体の記録誌や仏教系メディア、被災地での聞き取りから、東日本大震災の現実を記録する。緊急対応から復旧へと膨大な業務。予算が10倍になっても「さばける人員がいらない」。がれき除去、遺体収容、洗濯して保管された遺体の衣類、仮埋葬。取り組んだ職員は、いままも安置所があった場所に行くこと動悸が激しくなると言う。思い出したくない

が、「伝えておかなければ事実が分からなくなる」。聞き取り途中、感情が揺らぎ、中座せざるをえない職員もいた。公式には記されぬことも含め、著者は残す任務に取り組み。「客観的事実を記録化しておくことは重要である。どう解釈され、利用されるのかは後世に託されるべきこと」

結論は急がない。学者に性急な「成果」が求められる昨今、専任ポストを持たずに在野で研究してきた著者ならではの強みだろう。資料が残るから、本書後半の関東大震災や濃尾地震のように後世に資する研究を重ねられる。10年、まだまだ丹念な記録が必要だ。

評・黒沢 大陸

本社大阪編集局長補佐